

# ヒラメの種苗生産

(栽培漁業種苗生産事業)

為石雄司・近藤徹郎

## 1. 研究の目的

放流用種苗として全長30～40mmサイズ、66.5万尾以上を目指して生産し、配布する。

## 2. 研究方法

### (1) 親魚・卵管理

親魚には当部で平成14年に生産した養成魚90尾を用いた。餌は生アジを主体とし、産卵期にはアジの表面にアスタキサンチンおよび総合ビタミン剤を添加したものを給餌した。H17年11月からH18年2月まで長日処理を、H18年1月から2月まで加温により飼育水温を15℃に保つことで産卵誘発を行った。得られた卵は浮上卵と沈下卵に分離し、浮上卵のみを一旦50t八角形水槽に設置したネットで1晩流水管理を行い、翌日計数して100t八角形水槽に収容を行った。

### (2) 仔稚魚管理

良質種苗生産技術開発と共に、昨年度から大幅な省力化とコスト削減を目的として生産回数を3回から2回に削減した。収容密度は1.5万粒/tとし、計300万粒を収容した。生産初期は止水換水とし、日齢28日頃から流水飼育とした。止水換水時の飼育水はオゾン殺菌海水を100t水槽に貯め、1晩曝気したものを使用し、流水飼育では当初は砂ろ過UV海水を使用し、生産後期には生海水も併用した。飼育水温は疾病および脊椎骨癒合防除のため16℃とした。餌料にはL型ワムシ、北米産アルテミア、配合餌料を成長にともない給餌し、ワムシ給餌期間中はナンノクロプシスを100万細胞/cc程度となるように飼育水へ添加した。ワムシ、アルテミアの栄養強化にはマリンアルファとマリングロスを用いた。また、早期の配合給餌開始は脊椎骨癒合などの骨格異常を引き起こす可能性があることから日齢22日以降に行った。

### (3) 無眼側黒化・有眼側白化状況調査

サンプルには全長80mmまで各中間育成場で飼育された種苗を用いた。

## 3. 研究結果

### (1) 生産結果

H18年1月18日から20日にかけて計300万粒の卵を収容し、277万尾（孵化率92%）のふ化仔魚を得た。生産は4月25日まで実施し、全長30～40mm、計110万尾（ふ化後生残率40%）を取り上げた。

### (2) 無眼側黒化・有眼側白化状況

近年の無眼側黒化魚は色素の沈着が希薄、もしくはごく軽微で天然魚と区別が難しいという特徴を持つ個体割合が増加している。本年度の平均黒化率は41.4%（前年度：57.8%）であり、そのうち黒化軽微魚は23.8%（前年度：33.3%）であった。有眼側白化は生産期間中に少数の出現は確認されていたが、今回調べたサンプルでは0%（H17年度1.2%）という結果であった。

## 4. 研究成果

県内ヒラメ中間育成施設10カ所に計63.5万尾の出荷を行った。各施設で全長80mmまで中間育成され、6月～7月にかけて県内各地先に放流された。